とある世界の終焉廼焔（ラグナロク）

鐘♪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある世界の終焉廼焔（ラグナロク）

【Ｎコード】
Ｎ７９６２Ｐ

【作者名】
鐘♪

【あらすじ】
学園都市　総面積は東京の３分の１、８割は学生の実験都市である、科学の力により超能力が解明された都市、一人の少年・神童焔真は学園都市２３０万人の頂点８人のＬｖ５の第一位である、学園都市の裏を知る彼の物語、とあるシリーズ２作品目となります、またまた不定期更新でチートものですが、よろしくお願いします。

主人公設定（前書き）

他の作品の更新中？ですが書いてしまいました^^；
よろしくお願いします

主人公設定

主人公設定

～主人公設定～

名前　神童（しんどう）　焔真（えんま）

性別　男

身長　１７７ｃｍ　体重　５７ｋｇ

見た目　髪の色は黒　瞳の色は紅　直江大和っぽいの（真剣で私に恋しなさい）

誕生日　６月２４日

一人称　俺

職業　統括理事会直下の実行部隊「アイテム」のメンバー
　　高校生

好きな食べ物　アイス

好きな飲み物　コーヒー

大切なもの　「アイテム」のメンバー

能力　超能力者（Ｌｖ５）　能力名　終焉廼焔（ラグナロク）

能力説明　能力は特別な能力で特殊な炎を創りだす能力
　　黒は相手能力などを分解出来る炎
　　白はエネルギーなどを吸収する炎

「アイテム」のメンバーの一人、主にツッコミ役？

昔、麦野を救ったことから麦野には特に好かれている

戦闘では、あまり冷静を保てないタイプ

ファミレスでは昼寝が多い、特殊な炎から実験動物（モルモット）にされていたが

研究所を破壊して逃げ出した過去を持つ

主人公設定（後書き）

焔真「何をやってるんだ？」

作者「勢いでやってしまいましたw」

焔真「まぁ期待なんて誰もしてないだろうが」

作者「自己満足です」

焔真「こんな時期にやって大丈夫なのか？」

作者「……」

焔真「こんな作者ですが、よろしくお願いします」

次回　第一話　「終焉廼焔（ラグナロク）」

第一話　終焉廼焔（ラグナロク）（前書き）

作者「やっと始まったー第一話だ」

焔真「誰も期待してないから安心してー」

作者「焔真の日常的な感じが今回の話です」

焔真「え？無視？」

作者「では、よろしくお願いします」

焔真「主人公無視って酷いと思う……」

第一話　終焉廼焔（ラグナロク）

一人の少年は学園都市の夜の裏路地を、お気に入りの音楽を聞きながら歩いていた
前に不良らしき塊が集まっているとも知らず……

「あぁ！なんだテメェ！何のようだ！？」
「ぁー音楽って素晴らしいと思う」
不良軍団（スキルアウト）？らしき奴らを完全無視して通り過ぎようとする少年
「テメェ……無視してくれるなんて、いい度胸じゃねぇーか！」
「やっぱ人気だよなー俺も部活とか入れたら軽音楽部とか入部してみたいな～」

またもや完全無視する少年
堪忍袋の尾が切れたのか少年に殴りかかる不良A
「ん？凄く不味い状況になってる？まぁ関係無い」
流れるような動きで不良の攻撃を回避する少年
一瞬驚いた不良達であったが一人の男が高らかに笑う
「俺の炎で燃やしてやるよ！」
男が右手を前に出すと火球が出来上がる
発火能力者（パイロキネシスト）である
「……綺麗な炎だ、俺の炎とは大違いだ」

「テメェーも発火能力者（パイロキネシスト）か、関係ねぇー！燃えろ！」

男の放つ火球は少年に向かって一直線である

……しかし、火球は少年に当たる直前で白い何かに防がれた

「白い炎見たことある？……黒い炎も見せてあげるよ」

学園都市の裏路地で数人の男の叫び声が響いた

「俺を倒そうなんて……１０年？まぁまだ早いよ」

少年は再び音楽を聴きながら闇へ消えていった

「……って夢を見てたんだよ」

「結局会議中なのに寝てる奴は毎回焔真って訳よ」

……なんか凄く俺が輝いてる夢だったな

軽音楽部かーギター弾けないな～無理だ

「超不真面目ですね、私を見習ってください」

「映画のパンフ見て話聞いてる奴なんか見習いたくない」

「アイテム」のメンバー絹旗最愛、大能力者で凄く強い

「窒素装甲（オフェンスアーマー）」窒素を自在に操る凄い能力者

「今度また見に行きましょう！超面白そうな映画発見です！」

「きぬはた……えんまと、いっしょに行きたいだけじゃない？」

「うっ……」

「アイテム」のメンバー滝壷理后　大能力者で無気力者
能力追跡？だったような能力の能力者まぁ便利な能力である
「結局缶詰の素晴らしさは焔真と私しか分からないって訳よ」
「分かった覚えは無いんだけどな」

「アイテム」のメンバーフレンダ　能力なんかに頼らない子
何やら面白そうな装置で活躍する出来る子である

「焔真ー会議で寝たの何回目ー？」
「……3回だろ？仏の顔も3度までだ！」
「３０回ぐらいから数えてないけどねー」

「アイテム」のリーダー麦野沈利　俺と同じＬｖ５
「原子崩し（メルトダウナー）？」だったような名前の能力でレーザー怖いです、はい。

「気にしたら負けだ」
「逃げの一手、超かっこ悪いですよ」
「はぁーもういいわ」

こんな感じで「アイテム」のファミレスでの会話は平和である
統括理事会も含めた暗部組織等の監視・制御が仕事だが、まぁ忙しい

「んじゃ今日は解散しましょ」
「映画ー映画ー映画ー！」

絹旗・滝壷・フレンダは個人の用事があるらしく行ってしまった

「んー俺は「んじゃ買い物に付き合ってね」了解です……」
拒否権の発動も許されること無く、セリフも最後まで言わせてもらえず
俺の昼寝の時間は幕を閉じたのである……（泣）

「んーアイスは最高だ！」
「いい服買えたわね……さて？…ん？」
何か気になる様子の麦野
焔真が、麦野の向いてるいる方を向いてみると……

「ウギャァァー！不幸だー！」
「無視してんじゃないわよー！」

素晴らしく凄まじい状況だな、ありゃー常盤台中学の制服だったような気がする
あの人も、慣れてるなーあの電撃の嵐もやり過ごす……か

「面白そうね」
「あれ面白がる麦野は凄いと思うよ」

可哀想とか心配する場面な感じで面白がる麦野……さすがだな～
こっちへ向かってきてる？周りを見てみると道を空けているように皆移動してるだと！？

「おいおい！麦野！俺達も回避しねぇーと！」
「んー大丈夫でしょ」

不幸だーと叫ぶ少年が俺達の７ｍ前ぐらいで転んだ
何と言う展開と焔真が思っていると電撃が焔真へ一直線

「俺のほうが不幸だろー！」

咄嗟に回避行動へ移ったが……アイスを持っていた手を見てみると

「……嘘だろ？俺としたことが」
「……（やばい、やばい）」

麦野も少し焦っている様子だが
焔真の雰囲気を感じ取り５歩ほど下がった

「お、おい！大丈夫か！」
「ご、ごめんッ！？」

焔真から異常な殺気に本能的に下がる不幸少年と電撃少女

「俺のアイス……覚悟はＯｋだよな？」
「わ、悪かった、ビリビリも」
「常盤台……超電磁砲（レールガン）か？」
「そ、そうよ……」

まさかの超電磁砲かよ、俺は運が良いのかも
久々の実力者との戦いだー

「うむ、アイスの件は無しでいいからさ！二人対俺で戦わない？」

二人は唖然とした表情で焔真を見ていた……

第一話　終焉廼焔（ラグナロク）（後書き）

焔真「なんつーご都合展開」

作者「勢いでやったぜ」

焔真「相手を考えて戦闘フラグたてやがれーー！」

作者「すみませんでしたー！」

焔真「麦野さん原作と変化ありすぎな気がするぞ」

作者「過去話はまた今度で」

焔真「次回は嫌な予感しか……」

作者「応援はしてるぞ！……では！」

作者「皆様からの評価・感想待ってます！」

作者「駄文ですが……次回もよろしくお願いします」

作者「次回　第二話　超電磁砲（レールガン）」

第二話　超電磁砲（レールガン）（前書き）

作者「超電磁砲と幻想殺しのタッグだ！？」

焔真「それじゃー俺が負けるような言い方だな……」

作者「さぁどんな戦いになるのか？」

焔真「前書きで俺を無視して楽しいか？」

作者「ではどうぞ」

焔真「酷い作者だ」

第二話　超電磁砲（レールガン）

不吉な笑みで立つ少年と唖然とする不幸少年と超電磁砲
いきなり戦いを申し込まれたらそうなるだろう

「んで？やる？」
「ア、アイス二本でどうだ！」
「よし、その話のった！」

不幸少年の一言で戦いを申し込んで３０秒後に戦いは幕を閉じ
アイス二本でルンルン気分の少年と財布を見て絶望する不幸少年
こうして二組は別れていった

「あれがー第四位か」
「んーお子様だったわね」

お互い超電磁砲（レールガン）とは初対面であり
イメージと全然違ったらしく笑っている二人

「二対二で言ってくれても良かったじゃない？」
「そしたら俺達が勝つだろ？いくら四位でも一位と五位相手じゃー無理だろう」

そうね、と納得した表情で言う麦野

「誰かさんが一位になってから色々実験も終わって仕事も少し多く

なったんじゃない？」
「まぁ暇な人生よりはいいさ」
「ちょっと待ちなさいよ！」

背後から女の叫び声
焔真が後ろを振り向くと第四位の姿があった

「ん？彼氏とのデートはどうしたんだ？」
「だ、誰が！あんな奴と！」
「あんま顔しながら言われても説得力無いわね」

顔を真っ赤にさせ否定されても説得力は無い
何のようなのか聞いてみると
自分がＬｖ５だと分かって勝負を挑まれて余裕な感じだったのが
気に召したらしい

「んで？勝負したいと？」
「そうよ！」

横の麦野から「ご愁傷様第四位」と小言が聞こえたがスルーしよう
焔真は携帯で時間を確認して言った

「うむ、んじゃやるか、麦野は帰っててていいよ」
「んーんじゃ」

こうしてＬｖ５同士の戦いが始まる

「まさか超電磁砲と戦う日が来るなんて」
「その余裕、後悔させてやるんだから！」

場所は橋の下、周囲には誰も居ない
戦いが出来る条件は揃っている

「んじゃ先手は譲るよ」
「っ！？」

さすが超電磁砲と言うべきか雷撃の槍を放つ
むちゃくちゃ速い、正直言えば回避するのが精一杯だけど

「んじゃ燃えろ！」

黒い炎が同じ槍のように第四位を襲う
電磁加速を加えた自分の動きで回避される

「なっ？黒い炎？」
「カッコイイだろ？はぁぁ！」

ゴォォォォ！っと勢いよく放たれた炎が第四位を襲う
電磁加速がある分、素早い動きで回避される

「そういえば、名前はなんだ？」
「御坂美琴よ！」
「俺は神童焔真だ……喰らえ！」

黒い炎が竜の形をして御坂に襲い掛かる
御坂はポケットから何かを取り出し指で上へ弾く
「舐めてんじゃないわよ！」
落ちてきたコインを弾き音速の3倍のスピードでこちらへ向かってくるコイン
しかし……
「なっ！？」
「当たり前だろ……普通溶けるって……竜に喰われろ」
隙を見せた御坂だったか、黒炎竜を回避し、焔真を見る
「アンタ一体……」
「終焉廼焔（ラグナロク）の能力者……一応1位だから…よろしく」
なっ！と声を上げる御坂だったが、音がするので振り向けば
黒い何かに襲われ意識を闇へ落とした
「……戦闘技術が足りない？油断してたのか」
と最後に倒れる御坂に一言呟き、焔真はどこかへ帰っていった

「以外に弱かったんじゃない？」
「なんで麦野が居るのかな？」
「居ちゃダメだった？」

そんな事言われたらダメなんて言えるはずが無いことを知っているだろうに
さっきの戦いも見ていたのであろう

「油断してたんだろうな」
「相手が悪かったんじゃない？」
「素直に嬉しいからシャケ弁奢る」
「やった♪」

やられた……考えて言えばよかったと思ったときには遅かった
たぶんシャケ弁狙いだったのだろう……俺の金

「んじゃコンビニ行きましょ」
「ハイテンションなこった」

こうして確実に平和とは言えないような焔真に一日は過ぎていったのである

第二話　超電磁砲（レールガン）（後書き）

焔真「あれー上条さん出番少なっ！」

作者「後々大活躍予定！？」

焔真「？マークつけられたら困るんだが」

作者「御坂さん油断しましたね」

焔真「本気だしたら怖いもんじゃ」

作者「ぁー文才が欲しい」

焔真「話題の切り替えしが凄いな……まぁ無駄だろうに」

作者「そうだな……では！」

作者「皆様からの評価・感想待ってます！」

作者「駄文ですが……次回もよろしくお願いします」

作者「次回　第三話　暗部依頼（ミッション）」

第三話　暗部依頼（ミッション）（前書き）

作者「アイテムとしての仕事だねー」

焔真「面倒だな」

作者「ふっ、君の出番など誰も待っては居ない！アイテムメンバーの出番だ！」

焔真「主人公に言うセリフか！」

作者「と、言うことで本編をどうぞw」

焔真「作者としてどうなんだ？」

第三話　暗部依頼（ミッション）

「研究施設の破壊ねぇー」

「アイテム」としての仕事、任されたのはいいが俺一人
他のメンバーは４人仲良く別仕事……仲間だよな？

「あれかー……昔を思い出すな」

「実験動物（モルモット）」として扱われていた俺
その生活が嫌になり研究所ごと破壊した俺

「置き去り達の利用は許さん」

表情はいつも通りであるが
怒りを内心に秘めた焔真が研究施設に入っていく

「な、なんだ？貴様は侵入者か！？」

「燃えろ！」

無残な叫びとともに灰も残らず燃え尽きる男
叫びのせいで武装集団らしき男達が寄ってきた

「黒炎・竜」

黒い炎が竜の形をして男達を燃やし、喰らっていく
灰も残さない残酷な黒炎は焔真の合図がないと当分消えることの
無い炎

「ん？……この部屋が実験室？」

焔真が部屋に入ると一人の男がヘラヘラと笑って焔真を見ている
余裕なのだろうか？笑いを止めない

「さすが一位だね！僕の実験材料にピッタリだよ！」

「……」

「僕の成果だ！殺せ」

普通とは言えない表情をした子供が数人
自我を失っているのであろう表情で焔真へ向かって歩いてくる

「この子達の再生能力は最高だ！さぁ殺せ」

「白炎・剣」

白い炎が空中で剣の形をして襲い掛かる
腕に直撃し燃えると思っていたが……子供達は自分の腕を引き千切った

「おいおい……」

「ふふふ、再生能力を見せてやれ」

本当に再生しちゃったけど……気持ち悪いなぁ

「テメェ……燃やしてやる」

「この子達に勝ってから言うんだな！」

まだ分かっていない、この男は焔真を下に見すぎた
焔真の周囲に黒い炎が纏う、その黒い炎は８つに伸び蛇のような

形になっていく

「ゴミに見せることになるなんて……八岐大蛇・邪炎」

「な、ヒィィィ！」

８つの首を持つ大蛇、黒い炎で創られた八岐大蛇は焔真の技の一つ

子供達を飲み込み燃やし、灰も残さず焼きつくし

男の前に立つ、男は腰が抜けて立てず恐怖で声もでない

「魂ごと燃え尽きろ」

恐怖混じる叫び声とともに研究施設は黒い炎に包まれ

その炎が消えた時には、その場所には何も無い焼け野原となっていた

「最低な気分だ」

あんな実験された子供達を殺したこと

焔真は気分優れぬまま麦野達の居る隠れ家のような場所へ戻る

「……任務成功」

「お疲れ様ー……どうしたの？」

珍しいことに麦野が一番に声をかける
見るだけでも分かるくらいに焔真の気分は優れていない

「久々の最低な内容の任務だった」
「お疲れ様です、超心配してましたよ……麦野が」
「き・ぬ・は・た？」
「超疲れたので！寝ます」

脱兎如く逃げ出した絹旗
恐ろしいです麦野さん

「そりゃーありがとう」
「こ、構成員のことを心配するのはリーダーとして当たり前よ」
「むぎの……依頼よりも、えんまの心配してた」
「……（／／／）」

可愛い……おっと、いかんいかん
昔とは大違いの麦野だ……仲間の心配なんかしない性格だったような気がするが

「結局「フレンダ」……はい」

凄まじい威圧の纏う声で名前を呼ばれ言葉が出ないフレンダ
やっぱ恐ろしく怖いです麦野さん

「あんな任務は勘弁だ……」
「一人で依頼は避ける？」
「結局、実は二人で行きたいって訳よ」

一筋の光がフレンダの横を通り抜ける
何の魚の缶詰かは見えなかったが落とし、光の通った横を見る
「ブチコロシ？一発いっとく」
今日みたところ最高の笑顔で恐ろしいことを言い放つ麦野
先ほどの研究員みたいに恐怖で声も出ない様子
「んー、そういう任務は麦野と行こうかな？」
「え？本当？んじゃ決定ね」
先ほどのレーザーに劣らぬ速さの切り替えし
フレンダと滝壺はアイコンタクトで何かしながらニヤニヤしている
「さて……楽しみにしてたアイスの時間だ」
「「「あっ……」」」
完璧に同時に声をあげる３人
３人がアイコンタクトで何か焦りながら何か行動を起こそうとするが……
「４個も買った！スーパー・デラックス・ストロベリーＥＸ……この時のために頑張った！」
俺は頑張った！この時間を待ちに待った！
さぁ！俺の女神……達が居ない？
「あ、あれー？どこに置いたっけ？」
「か、缶詰補給してくるー」
「眠い……少し寝てくる」

フレンダと滝壷は部屋から出て行った
麦野だけかーせっかく少しぐらいなら、あげようと思ったのに！
……無い？どこを探しても無い？

「麦野ー俺のスーパー・デラックス・ストロベリーＥｘ知らない？」
「えーと、し、知らないわよ」

……まさか？

「麦野……そこにアイスついてるよ」
「嘘！ちゃんと拭き取った……」

場が凍りつく、４つのアイスは焔真以外の皆で美味しく食べていたのだ
焔真の買ったアイスだろうなーとは察していたが美味しかったため１つも残っていない

「今日まで限定のスーパー・デラックス・ストロベリーＥＸを食べたんだね」

焔真の周囲に薄っすらと黒い炎が見えてきた
さすがの麦野も焔真と自分の実力の差は知っている

「……焔真ぁー謝るから炎出すのやめて？」
「１個１７００円のＥｘが……今月最高の時間が……」

まるで麦野の声は聞こえていない
昔の麦野ならばキレていたであろう状況だが、実力差を知っている焔真相手にはどうしようもない

「麦野ー美味しかった？」
「え？うん、凄く美味しかった……白炎まで出すのやめてー！」

自分のキャラ崩壊も気にしない麦野
それどころでは無い状況なのであろう

「美味しかっただろうねーだってＥＸだもん、通常版でも美味しかったのに」

炎が消えたと思うと泣きが入りそうなぐらい絶望している焔真

「えーっと、言ってなかったけど、一袋だけなら……」
「麦野様ー貴方は天使だー！」

凄まじいスピードと凄まじい切り替えしで
麦野の抱きつく焔真、どこかの空間から殺気が出た感じがするが
気にしない

「（だ、抱きつかれた！焔真に抱きつかれた！）これ一袋だけど」
「おー！ＥＸ麦野ありがとう！」

もう麦野達が食べたことは忘れているのであろう
さらに強く抱きしめられ興奮状態の麦野に
ガ〇ガリ君のようなストロベリーＥＸを食べる焔真

「あー！素晴らしい、ＥＸの名は伊達じゃないな」
「そ、そう…ねぇ明日暇？」
「奴(アイス)は化け物か！？ん？暇だけど」

今のご機嫌の焔真なら誘えるだろうと思い麦野が話しかける

「明日さー気分転換に二人でどっか行かない？」
「了解ー9時ぐらいにファミレス集合でいい？」
「んーいいわよ」

こうして……「アイテム」は今日も平和であった？……

第三話　暗部依頼（ミッション）（後書き）

焔真「麦野さん口調が変じゃありませんか？」

作者「すいません、過去話もありますが崩壊してますｍ＿＿ｍ」

焔真「誰も期待してないけどね」

作者「あ！感想ありがとうございました！頑張りますｍ＿＿ｍ」

焔真「ありがとうございます」

作者「頑張らねば……それでは！」

作者「皆様からの評価・感想お待ちしております！」

作者「駄文ですが……次回もよろしくです」

作者「次回　第四話　禁書目録（インデックス）」

第四話　禁書目録（インデックス）（前書き）

作者「デートだ！？」

焔真「？マークはやめてくれ！」

作者「ふっ殺気に溺れてやられてしまえ」

焔真「作者としてどうかと思う」

作者「そういう電波を受信しただけだ」

焔真「世の中恐ろしいもんだな」

作者「では！どうぞ」

第四話　禁書目録（インデックス）

「9時だったよな？」

約束通りの時間に来てみると……

すでに朝食を済ませた麦野さんの姿が……マジで！？

「えっと？俺遅刻しましたか？」

「んー、5分前だけど？」

……貴方は何時から居たんですか？

と思う、……聞いてみるか

「何時に来た？」

「遅刻しちゃー悪いから、8時ぐらい？」

「申し訳ありませんでした！」

凄まじい勢いで土下座

一時間も待たせたなんて思ったら……すいませんでした

「ちょ、なんで土下座してんの？」

流石にファミレスの真ん中で土下座されて普通じゃ居られない

これが学園都市第一位である……

「んじゃ行こうぜ」

「ん、1時間って長いわね、けっこう」

「すいませんでした！」

第一位が第五位にイジられるのを誰が想像しただろう
ファミレスの店員さんも引いている状況である

「どこ行く？」
「んー、アクセサリー買いに行かない？」
「了解」

場所も決まった俺達の前に
可愛い顔したシスター？さんが見捨てないでくださいって雰囲気で倒れている

「あの店にしましょ」
「おいおい！目の前で倒れてる女の子居るけど？」

完璧なスルースキルを発動させた麦野
シスター？さんは何かを求める声で一言

「おなか減った……」
「焔真ぁー行きましょ」
「麦野さん貴方は鬼ですか？目の前の状況を片付けないと」

素晴らしいスルースキルでシスターさんを無視する麦野
捨てられた猫の表情に負けた焔真

「んー、誰か保護者さん居る？」
「とうまー学校行っちゃった」

とうま?誰か分からないけども兄弟さんかな?

「んー、んじゃこれで適当に食べてきていいよ」

適当に少しお金をあげると

「これ!とうまが欲しいって言ってたものだったかも」と喜びながらどこかへ走っていった

「まぁいいや行こう」

「ん、行きましょ」

名前も聞かず、どこか走り去ってしまったが……いいか

「これ似合うと思う」

「んーけっこういいんじゃない?」

こんな感じで頑張って麦野に合いそうなアクセサリーを探していくファッションセンスやら何やらは……まったく無いぐらいだが頑張らねば

「んじゃこれ買おうかな」

「いやー待たせた分もあるし、俺がプレゼントってことで」

ここくらい男を言う奴を見せなくてどこで見せると一人でブツブ

ッ言いながら
「たぶん似合うと思うから」
「ん、ありがとう♪」
随分ご機嫌な麦野、焔真はあまりアクセサリーとか買ってくれないらしい
周囲から殺気ある視線で見られる中店の近くから爆音がする
「……行ってみるか」
「そうね」

野次馬が数人居るが特に人が死んだわけでもなく
何か店が壊れたわけでは無い
「奥だな」
「えぇ、行ってみる？」
それに同意して奥へ行く二人
数分行くと、凄く背の高いような男が一人返り血を浴びた服装で立っている
「うわー戦闘フラグ？」
「麦野沈利と神童焔真だな？」

男は二人の名前を呼んだかと思うと
槍のような武器を構え、戦う気満々で立っている

「舐められたわね？」
「お互い様じゃない？」
「貴様ら随分余裕そうだな」

槍構えられても戦国時代じゃないんだから
時代は進化しているのだよ！

「ふっ占いで一位だった俺に勝てるとでも？」
「運任せなのね」

さすが麦野……鋭いツッコミだな

「……殺されるのに余裕だな」
「お前がか？」
「貴様ァァァァ！」

はい、死亡フラグー。

「なんで二人相手にしようと思ったんだろうな」
「うっ……なっ」

男は心臓に穴は空けて崩れ落ちる
能力を把握してなかったんだろう、レーザーには反応出来なかった

「はぁー何がしたかったんだ？」

「せっかくの休日を邪魔してくれるなんてね」

以外にお怒りの様子

こうして……裏で歯車が動きだすことも気づくことなく

「アイテム」の日々は過ぎていった

第四話　禁書目録（インデックス）（後書き）

作者「今回は最後のための話です」

焔真「戦わせる必要は？」

作者「まぁーあったさ！」

焔真「最後のためって禁書目録さんは？」

作者「……」

焔真「どうしてだしたんだー！」

作者「まぁ後々……それでは！」

作者「皆様からの評価・感想待ってます！」

作者「駄文ですが……次回もよろしくです！」

作者「次回　第五話　氷結時間（アイスタイム）」

外伝話　不幸と兎（前書き）

作者「突然外伝ｗ」

焔真「普通新年外伝やらない？」

作者「ネタが思い浮かばなかったｏｒｚ」

焔真「これが他の皆様との文才の差だな」

作者「勢いが俺の力だ！」

焔真「駄文になるんだけどな」

作者「本編をどうぞ！」

外伝話　不幸と兎

「超楽しみです！」
「誰も居ないな……」

絹旗と映画を見に来た焔真、いつものようにＢ級らしい
周囲には誰もおらず……二人だけ

「あー眠いな」

隣を見ればルンルン気分の絹旗さん
なんでＢ級映画なんだろう？と疑問に思う焔真であったが映画が始まった

「……超つまんねぇー」
「もうすぐ主人公死にますね」
「いや……ピンチの時に覚醒が主人公ってもんだ」

ものすごく暇で眠くなるような映画で絹旗もガッカリのようだ

「正解したほうが超奢るでどうですか？」
「天下のＬｖ５の勘を見くびるなよ」

～3分後～

「……超負けた」
「やっぱり死にましたね、超つまんなかったです」

絹旗の予想通り主人公は死亡し焔真の負け
この後奢らなければいかない焔真は絶望の土下座中

「俺の金が巣立っていく」
「B級映画グッズを買ってもらいます！」

……こうして焔真の財布は素晴らしく軽くなり
今日も「アイテム」は平和だったとさ……。

「……って夢を見たんだよ、初夢で」

「結局、この中の奢らされるキャラって焔真な訳よ」
素晴らしく金の無くなる年になりそうな予感がする
「じゃ！今から超見に行きますか！？」
「遠慮しとく、夢オチで終わらせたいから」
「えんま、兎耳……似合う？」

グハァッ！と声のする方向を振り向いて倒れる焔真
兎耳を装備した滝壷さんが立っていたのである

「ちょ、焔真倒れちゃったけど」
「結局、焔真も男って訳よ

麦野は滝壷のほうを、じーっと見て
滝壷の真横まで行き、ヒソヒソを何かを頼み込んでいる

「ん、ありがと」
「むぎの……似合うと思う」

麦野は滝壷から兎耳を貸してもらい装着したのである
絹旗とフレンダは声も出ず、自分の頬を叩いたりと現実逃避している

「いやー可愛かった、グハァッ！」

予想通りのリアクションをとった焔真
後方へ鼻血を噴出させながら吹き飛んでいった……「アイテム」は今日も平和であった

外伝話　不幸と兎（後書き）

作者「新年あけましておめでとうございますｍ－－ｍ」

焔真「おめでとうございますｍ－－ｍ」

作者「兎年ネタでしたーってやつですｗ」

焔真「俺が立派な変態さんに見えるね」

作者「いやー平和が一番さ」

焔真「……話題を切り替えやがって」

作者「次回からは通常の予告どおりですｗたまぁーに外伝入ります」

焔真「期待してる人は居ないと思うけど頑張れｗ」

作者「おぅ！では！」

作者「今年が皆様にとって良いお年であることを願っています！」

作者「駄文ですが……これからも、よろしくお願いします！」

第五話　氷結時間（アイスタイム）（前書き）

作者「何だか久々な感じがする」

焔真「昨日は更新しなかったしな」

作者「忙しかった……ｏｒｚ」

焔真「今回は、どんな話だ？」

作者「題名通り？」

焔真「疑問で返されても困るんだけど……」

作者「詳しくことは本編をどうぞ！」

第五話　氷結時間（アイスタイム）

「俺と麦野は狙われてる……かな」

瞬殺で終了した前回の槍を持った男

能力が無かったのだろうか？武器を持って俺達に挑んだ

「どっかの組織かな？」

焔真は一人、どこかのビルの屋上で学園都市を見下ろしている

自分の命は、狙われているが麦野を二人となると話が別になる

「まぁ五位が簡単に負ける訳ないか」

一人でしゃべりながら、どこかへ消えていった焔真であった……

「任務成功、まぁ楽勝かな」

とある工場でフードを被った男の子が笑っている
周りには無残にも倒れている男達

「んー、まぁ！僕がやれば楽々だ」

少年が笑いながら工場を去ろうとした時

「風紀委員（ジャッジメント）ですの！……どうなるかは分かりまして？」

風紀委員の白井黒子登場である
少年は鳩が豆鉄砲食らったような顔で驚いている

「……随分とお子様が来たもんだ」
「貴方に言われたくはありませんわ……」

お互い戦闘態勢にはいっている
お互いに能力は不明、先に動けば能力で対応されるかもしれないと思いながら
白井は相手の背後に空間移動した

「空間移動（テレポート）……か」
「終わりですの！…っ！？」

背後から一撃で終わる予定だったのだろう
自分の動きが遅い……相手の拳が白井の腹に直撃する

「カハァッ！……何が……」

自分の動きはスローモーションであったが相手の動きは通常通り
どういう能力なのか理解出来ない白井

「そーんな状態じゃー演算出来ないだろ？」

一瞬だった……先ほどまで１０ｍほど距離があったはずだったのに
気がつけば目の前に男の子が居た……

「僕の勝ち♪」

ドスッ！……と白井はそこで意識を闇へ落とした

「ふぅーまぁ余裕」
「面白い能力だな」
「っ！？」

後ろを向けば男が一人立っていた
黒い炎を纏いながら……

「面白い能力だな」
「っ！？」

風紀委員の女の子が敗北した
散歩してたら見つけた能力者同士の戦い

「神童焔真……目標（ターゲット）」
「は？……そんな有名人になった覚えは無いけど」

ふふふ、と不吉な笑みを浮かべる男の子
ターゲットってことは狙っていたってことか……

「任務開始！殺す」
「若いな……まぁ負けてやる気は無いけど！」

一瞬で距離を先ほどのように詰める少年
しかし、焔真は白い炎を纏い防御体制

「接近で殴って俺に勝てると思うか？」
「くっ！……炎を使うって聞いてたけど……黒と白の炎なんて聞いてない」

……調べが足りなさ過ぎると思う
槍の馬鹿男はまったく調べ無し……対策無しってのはダメだろう

「まぁしかし……その年齢で演算能力は凄いもんだ」
「僕の能力が分かったのか？」
「たぶん……1秒を長くしたり短くしたり……聞いたことも無い能力だ」

「さっすが一位だ……1秒で最大6秒まで活動出来るんだよ」

白井との戦闘時も自分の1秒の動きを6秒にすれば対応も簡単であろう

しかし、時間を操っても炎を纏っている焔真に無策では勝つことは難しい

「逃げるのも策だからね」

「逃がすと思う？」

黒い炎を前方に放つが……少年の姿は無く

工場には焔真と白井の姿しか無かった……

第五話　氷結時間（アイスタイム）（後書き）

作者「いやー敵さん強いね」

焔真「普通に逃げて行ったけどな」

作者「今日中にもう一話投稿すると思います」

焔真「まぁ頑張れ」

作者「まぁ頑張るwそれでは！」

作者「皆様からの評価・感想待ってます！」

作者「駄文ですが……次回もよろしくお願いします！」

作者「次回　第六話　窒素装甲（オフェンスアーマー）」

第六話　窒素装甲（オフェンスアーマー）（前書き）

焔真「題名的に絹旗さんが主役か？」

作者「んー、微妙」

焔真「違う題名にしろよw」

作者「まぁいいじゃないかw」

第六話　窒素装甲（オフェンスアーマー）

凄く眠い……夜遅くまで仕事は厳しい
一発目の覚める何かが……

「超眠そうですね、起こしてあげましょうか？」
「一発頼む」
「了解」

ドゴォーンッ！

学園都市第一位は盛大に少女のパンチで吹き飛んで気絶した

「俺の能力を自動防御機能を……」
「常に炎展開するの？」

誰も近寄ってこないな……絹旗が羨ましい
自動防御機能って凄く楽だろうな……

「えんま……火だるま？」
「化け物だな……」

「終焉廼焔（ラグナロク）」の戦闘時の防御力は能力の中でも良いほうだろう
しかし、不意打ちには咄嗟に能力を展開出来るが、失敗したら終わりである

「火だるま……嫌だ」
「結局、能力展開してないと弱弱しいのが焔真って訳よ」
「接近戦にも少し自信あるんだけど……」

能力使わなくて接近戦……麦野である
身体能力が凄く高いと思う……たぶん能力使用不可だったら負ける

「窒素装甲（オフェンスアーマー）便利だなー」
「窒素無いと超何も出来ませんけど……」

そう……射程距離と窒素が無いとダメなのが弱点
だけどＬｖ４の中でも強いほうだと思うけどな……

「結局、能力には弱点がつきものって訳よ」
「えんまの弱点あるの？」
「当たり前だろ……雨の日とかに外で全力出せないとか」

「終焉廼焔（ラグナロク）」にだって弱点はある
雨の日は弱化、不意打ちに弱い、水の中だと無能力と同じ

「まぁ自動防御能力は諦めるか」
「そういえば……麦野が言ってましたが、焔真が超本気だすと凄いとか？」
「んー、まぁ俺の能力の名の元になった技みたいなのがあるんだよ」

簡単に言えば必殺技
普段は黒い炎と白い炎を使い分けて戦闘しているが
もう一段階上があると言う事だ

「麦野しか知らないかな」
「超気になります！」
「結局、隠し技ってのは主役の特許って訳よ」
「何の主役なんだ？」
「えんま……ツッコミいれたら負け」

意味不明なこと言ってるフレンダと滝壺
こういう話してる時が平和って感じるわ

「必殺技！超見せてください！行きますよ」

と勢いよく拳を焔真へ向けて一直線の絹旗

「え？……不意打ちは無ｒ」

ドゴォーーーーン！……と、「不意打ちダメって話してただろー！」と叫びながら吹き飛んでいった
麦野はため息をつき、絹旗は、あれ？とアイテムは平和である

「あー痛い……非常に痛い」

一人ブツブツ言いながら明るい学園都市を散歩している焔真
目の前に見覚えのある二人の男女が視界に入った

「だぁー！食べすぎだ！インデックス」
「あー不幸君と倒れてた女の子」

あ！と二人同時に声をあげる

「この前はありがとーだよ、凄く助かったんだよ」
「あーインデックスの言ってたのって、お前だったのか」
「とうま？だっけ、まぁ……改めて、神童焔真だ、よろしく」
「上条当麻だ」
「インデックスって言うんだよ」

こうして、この二人との出会いが
焔真を新たな物語の序章と言うのは誰も気づかない……

第六話　窒素装甲（オフェンスアーマー）（後書き）

作者「いやー窒素装甲強い！」

焔真「俺が殴られる話？」

作者「うわぁー弱！」

焔真「……」

作者「さ、さぁ次回の話は～（汗」

焔真「話の切り替えだけ早いな」

作者「次回はあの人が登場だ……それでは！」

作者「皆様からの評価・感想待ってます！」

作者「駄文ですが……次回もよろしくお願いします！」

作者「次回　第七話　一方通行（アクセラレータ）」

～お知らせ～（前書き）

作者「お久しぶりですm――m」

焔真「ぁ～どうしようもない作者」

作者「・・・・」

焔真「冗談だよw」

～お知らせ～

「とある世界の終焉廼焔」を見てくださって、ありがとうございます

最近更新できてなくて、申し訳ありません（誰も期待してねぇーよ）

受験勉強やら色々あったもので申し訳ありません

次回の更新は１２日までに更新します

１２日から、また更新していきたいと思いますｍ－－ｍ

こんな駄作ですが、よろしくお願いします。

今後の展開的には漫画の５巻ぐらいの過去話

焔真とアイテムの出会い

とある組織との戦いをやっていきたいと思います

よろしくお願いしますｍ－－ｍ

～お知らせ～（後書き）

作者「更新はまだですが＾＾；」

焔真「よろしければ見てください」

作者「次回もよろしくお願いします」

第七話　一方通行（アクセラレータ）（前書き）

作者「お久しぶりですｍ－－ｍ」

焔真「誰も待ってないけどな」

作者「今回の話は題名通りかな？」

焔真「なんで疑問なんだよ」

作者「ええじゃないかー」

作者「一方通行の口調わからねぇー！」

第七話　一方通行（アクセラレータ）

学園都市のとある道を、あるゲームをしながら焔真は歩いていた

「ふっ！ソロモンよ！私は帰ってきた」

時間は午後６時過ぎぐらいであろう

素晴らしい核兵器をゲームの中で放ちながら大声で叫ぶ我らが主人公

周囲の人からの悲しい視線も気にせず、アイスを買いに行く途中である

「神童焔真！目標を駆逐する！」

いつの間にか色々と変わっているが、気にしない

焔真が前を見ると見たことあるような男を発見した

「あれは……一方通行（アクセラレータ）じゃないか？」

「……なんでテメェが居るんだァ？」

一方通行……またの名をカフェイン中毒、焔真はそう覚えている

焔真が一位になる前の第一位、ベクトル操作の能力で圧倒的な戦闘力を誇っていた男

どこぞの誰かさんに倒されて色々あったらしく、能力をフルに使用できないらしい

「アイスを買いに来たんだ、そのケーキは……打ち止めちゃんには優しいな、お前」

「……うるせェ、テメェも見る限りアイツ一筋じゃねぇーか」

「黙れロリコン、焼き殺すぞ」

言い争うが、お互い否定はしていない
ミサカちゃんだっけ？同じような苗字を最近聞いたような気がするが気にしない

「そういえば、前打ち止めちゃんがプールに行きたいって言ってたぞ？」
「……チッ」

そう言って、一方通行はどこかへ去っていった
内心大爆笑の焔真だったが優しい奴だな、と思いながらコンビニの中へ入っていった

「ふむ、これで5日は買いに行かなくていいな」

「アイテム」の隠し部屋の一つの冷蔵庫に自分のエネルギー源を絹旗と滝壺は、今は不在の様子

「日頃の生活が報われたって訳よ！」
「どうしたんだ？」

ジャーンッ！と大量の缶詰を見せられる

フレンダ的には驚く場面らしいが焔真的には正直言ってどうでもいい
５０個ほどあるであろう缶詰、どうやって手に入れたか一応聞いてみることに

「その缶詰はどうしたんだ？」
「ゲーセンでゲットしたって訳よ」
「ふぅーん、おめでとさん」

抑えきれぬ涎とともにソファーに座り、食べ始めるフレンダ
一方の麦野はゲームで白熱中らしい

「何やってるんだ？麦野」
「最近発売した格闘ゲームらしいのよ、初回予約限定で人形みたいなのがついてくる」

机に置いてある初回予約限定品らしき物を見ると……
……最近見たことあるような人のフィギュアが置いてあった

「うん、きっと気にしたら負けだろうな」
「なんで！あんな雑魚にダメージ喰らうわけ！私のくせに！」

気にしたら負けだろう、これは奴（さくしゃ）の罠だ
きっと麦野に似たキャラが敵さんに攻撃されてるのだろう
気にしたら負けだ、気にしたら負けだ、気にしたら負けだ

「俺は寝ようかな……」
「あー焔真ぁーお腹すいたー」
「冷蔵庫に何かあるだろ？適当に食べても大丈夫だと思うけど」

「そうする」と言いながら冷蔵庫に向かう麦野
焔真は椅子に座り、そのまま眠りについた

「んー？……1時間寝たか」

目を覚ますと全員メンバーが揃っていた
何やら満足した表情である、何か甘い匂い、４人の中心に何かの袋？
５秒ほど考えると、焔真は大声をあげた

「まさか！俺のアイスーーー！」

時すでに遅し、冷蔵庫に溜めておいたはずのアイス達は全滅
振り向けば満足している麦野達、……焔真は寝ていた1時間を後悔した

「俺のアイスが……」
「焔真が適当に食べていいって言ったから食べちゃった」

「超美味しかったですよ」

もう二人の言葉など耳に入っていないだろう

焔真周囲にチラッと黒い炎が見え出した

「怒るだろうと思って2つ残しておいたけど」

絹旗達は凄いものを見た、麦野の言葉が言い終わる前に麦野に飛びつきアイスを食べる焔真を

なんという速さ、別の能力でも開花したのだろうかと思うぐらい速かった

「（また！焔真が抱きついてきた！）」

「愛しのアイスちゃん達よー！麦野～ありがとう」

学園都市第一位は普通に麦野の焔真を自分に抱きつかせる作戦にはまった

焔真はアイスを食べながら別次元から殺意を感じたが、気にせずアイスを食べきった

今日も「アイテム」は平和であった

とある学園都市のプールで打ち止めと一方通行が仲良く？
水の飛ばしあいで別の客を吹き飛ばしていたのであった

第七話　一方通行（アクセラレータ）（後書き）

作者「久々だとダメだな」

焔真「元々ダメだけどな」

作者「書いてる途中殺意を感じたが気にしない」

焔真「俺は終盤で殺意を感じたが……すげぇー恐い」

作者「また更新を始めます、お願いします！では」

作者「皆様からの評価・感想待ってます！」

作者「駄文ですが、次回もよろしくお願いします！」

作者「次回　第八話　無能処刑（ラストデイ）」

第八話　無能処刑（ラストデイ）（前書き）

作者「今回は終焉廼焔の真実が明らかに！？」

焔真「なんで疑問なんだ？何回目だよ！」

作者「真実はいつも一つ！」

焔真「・・・・・」

作者「と言うわけで、どうぞ！」

第八話　無能処刑（ラストデイ）

「ふっ……情報は手に入った、殺すだけ」
「死亡フラグの匂いがするぜ」
「私の魔術を舐めるなよ」

とあるビルの一部屋で男と女、魔術師　クロイ＝バンガル
「無能処刑」と言われる魔術を使用する魔術師
男は黒沼武史「移動封印（ストーリーストップ）」の能力者
二人は学園都市最強の男を殺すための計画を完成させ、行動へ移る

「北西から……信号が着てる」
「どんな信号だ？」
「新世界の神なる！……って感じ」

また素晴らしいネタ信号を受信した、滝壷さん
いつものファミレスで会議中……というか雑談中

「いやーカリカリ君は凄いよ、アイスだけどカリカリしてる」
「超聞いたことあるような名前です」
「焔真ぁーお仕事の依頼だってさー」

「了解」と一言、場所と時間を確認する
最近、焔真を見つけると目標とか言われている
雑魚ばかりなので気にしてはいないが話てみることに

「何やら俺の命が狙われてるらしいのだが……」
「日頃の行いが悪いって訳よ」
「ふーん、まぁ焔真なら大丈夫でしょ」

特に心配されることもなく、いつも通りの簡単スルーによって
焔真の命ピンチ的な話は幕を閉じた

「仕事だー仕事だーやったるぞー」

風の音しか無く、一人寂しく独り言

依頼は調査、最近ここら辺で意味不明な現象が起こってるそうなので調査依頼がきた

焔真が見る限り特に異常は無い

「……で、そこに隠れてるのは誰？」

「……さすが第一位さんだ」

黒と赤のドレスを着ている女の人

右手にはボールペン、殺意も隠すことなく明らかに戦闘態勢である

「また俺を目標だと？」

「正解だ……と言ってもアンタのことは調べがついてる」

「……情報だけで勝てるとでも？」

不気味な笑みを浮かべ、ボールペンで近くにある石材に何か読めない文字を書いていく

書き終わると、何か説明し始めた

「アンタの能力（ちから）は超能力しか消せないんだろ？アタシ達は魔術を使う、聞いたことあるだろ、物理的に意味不明な能力だよ、調べても分かんなかった、でもアンタ達の超能力よりも魔術の凄さを教えてやるよ、」

「……」

心の中で長文乙と一言、魔術って全然聞いたことなくもないけど
アレイスターは知ってたな、戦争が何やらって言ってた気がするし
アイツはよく調べたと思うがな……

「面白い……アンタの魔術見せてもらうよ」
「もう見せてるだろ」
「……マジ？」

石材が形を変化させ巨大な化け物？巨人？のような姿になる
「「無能処刑（ラストデイ）」アンタの触れていない物にアタシが書き込むと、その物質はアタシの物」
「形を変化させようと自由って訳か……そんな簡単に自分の能力言ってもいいのか？」
「ハンデって奴だよ！」

ォォォォォォォォと叫びながら魔術によって操作された巨人の拳が迫る
工事現場だったらしく、石材やら何やら色々と合体した巨大な拳なんとか回避に成功するが……目の前を見ると3体程巨人が居た

「魔術で力で作った巨人、今の巨人達が魔術物質と化しているんだよ！」
「だから……俺の炎は通じないと？」
「そういうことだ！」

巨人の隙は大きいが、4体も居ればカバーできる
一発一発の攻撃で轟音と巨大なクレーター、女は次々の化け物を創りだす

「ふぅー、アンタ未元物質(ダークマター)って知ってるか？」
「それがどうした？」
「メルヘン馬鹿の能力でな、素粒子を使って創る、異物の混ざった空間を創りだす物理法則なんて関係無しの反則的能力だ」
「未元物質(ダークマター)」理論上、この世に存在しない物質を創ることの出来る能力
異物の能力であり、素粒子、異物の混ざった空間の創りだす能力
「俺の能力と似てる、俺の能力は別になんでも分解や吸収する能力じゃねぇー」
「なんだと言うのだ……」
「俺の炎は素粒子を崩壊させたり吸収する炎を創りだす力だ、色々な粒子で創られる世界を崩壊させる力だ」

調べが足りなかった、女は自分が勝てると思っていた先程までの自分を恨む
創る「未元物質(ダークマター)」
壊す「終焉廼焔(ラグナロク)」
二つの異物な能力の性能は真逆である

素粒子とは大きく二つに別けられる
フェルミ粒子、物質を構成する粒子
ボース粒子、力を媒介する粒子
物理学において素粒子は物質を構成する最小単位である
最小単位であり、これより小さい存在はなく内部構造、空間的大きさをもたないのである
「未元物質」はこれらを司る物理法則を無視した異物の空間を創ることが出来る
これに対して焔真の炎は違う

「終焉廼焔」は炎の対象の素粒子を崩壊、吸収する力、光子、重力子であれ対象にしているならば

「バカな……そんな反則な……」

「調べが足りなかったな、魔術に期待したけど……ゲームオーバーだよ」

黒き炎が女を包み込み、消えた時には女の姿は無かった

「複合粒子の勉強でもしてこい……魔術師」

焔真は誰も居ない空間に向かって一人呟いた

第八話　無能処刑（ラストデイ）（後書き）

作者「焔真の能力の真実でしたー」

焔真「なんて複雑な能力なんだよ」

作者「素粒子なんて知らないーって人は複合粒子やハドロン、原子、分子的な考えで大丈夫だと思います」

焔真「うわぁー訳分からんって感じで読者様減るな」

作者「ｏｒｚ」

焔真「まぁ一応応援はしとく」

作者「読者様の応援が俺のパワー俺も自分で書いたのに分からんけどｗｗｗ」

焔真「自分が理解してから書きやがれ！」

作者「ええじゃないかー！それでは！」

作者「皆様からの評価・感想待ってますｍ＿＿ｍ」

作者「駄文ですが……次回もよろしくです！」

作者「次回　第九話　暗部戦争（イグニッション）」

外伝話　メルヘン無双（前書き）

作者「焔真と垣根の戦い話です」

焔真「また突然」

作者「垣根のイメージ崩壊注意です」

焔真「お前は垣根好きじゃないのか？」

作者「とある男キャラで一番好きかもしれん」

焔真「そのイメージを壊すと？」

作者「・・・どうぞ」

外伝話　メルヘン無双

とある学園都市の一日
神童焔真はゲームをしながら歩く

「ふっ！俺のガン〇ムに負けの二文字は無い！」
「違げぇーな」

声がするので焔真が振り向くと……
学園都市Ｌｖ５の第３位「未元物質（ダークマター）」の垣根帝督が居た

「俺のダブルオー〇イザーが負けるとでも？」
「テメェのより俺のガン〇ムユニコーンのほうが強いんだよ」

とてつもなくバカな会話で火花を散らす二人
お互い、自分が使う機体に絶対の自信があるようだ

「駆逐して欲しいか？」
「ムカついた……テメェ吹き飛ばしてやろうか！？」

焔真は黒い炎を垣根は白く巨大な翼を
「未元物質（ダークマター）」と「終焉廼焔（ラグナロク）」の戦いが始まる

「どうした！テメェのメルヘンな羽じゃー俺を落とすことはできん！」
「はっ！調子のってんじゃねぇーぞぉ！」

人の気配無く広々とした工事現場
第3位と第1位激闘中である、白い羽で太陽光を殺人レーザーに変えて攻撃する垣根
白い炎で攻撃を吸収していく焔真

「沈め！イケメンに回避出来ない火球！」
「そんな一直線な攻撃で…ッ！？」

見事直撃した黒い火球、羽で防ぐ
垣根は羽をさらに長く巨大にして突進していく

「飲まれろ！」
「絶望しろコラァ！」

工事現場は吹き飛び、周囲は轟音と衝撃波で焼け野原である
二人の傷もなく、まだまだ余裕の表情である

「どうして分からん！赤い彗星のよさが！」
「ゼ〇が正義の時点で俺は正義派なんだよぉ！」
「あえて言おう！カスであると！」
「突貫する！」

知らない人から見れば、痛い子と痛い子の戦争である
焔真と帝督的にがお互いのプライドを賭けた戦争である

「魂ごと燃え尽きろ」
「絶望しろコラァ！」

この戦いは終わらない……

「……って夢を見たんだ」
「何回寝たら気が済むのかしら？」
「えんま……今日どこか行くって言ってた」
「しまったぁーー！」

とてつもない速さでファミレスから出て走り出す
「アイテム」メンバーの言葉も耳に入ってなかっただろう

「よし！最後の一個！」

大きな箱に手を伸ばす、初回限定版のプラモである
焔真が手を伸ばすが……箱はゲットできなかった

「俺の勝ちだな」
「なっ……イケメルヘン……お前が何故」
「俺も欲しかったんだよ」

勝ち誇った顔で立つ垣根帝督が……そこに居た
限定版を手にしてレジで行く、垣根は焔真に一言言った

「絶望しろコラァ」

「垣根ええええええ！」

学園都市第1位が第3位に敗北した瞬間だった……

外伝話　メルヘン無双（後書き）

作者「勝者ー垣根！」

焔真「この俺が……負けた」

作者「垣根の口調分からなかったけどw」

焔真「次は絶対に勝つ！」

作者「以上、垣根と焔真の大決戦でしたwそれでは！」

作者「皆様からの評価・感想待ってますm――m」

作者「駄文ですが……次回もよろしくです！」

新・能力説明（前書き）

作者「皆様申し訳ありませんｍ－－ｍ」

作者「終焉廼焔を訂正したいと思います」

新・能力説明

～終焉廼焔について～

前までは「終焉廼焔（ラグナロク）とは発火能力設定にしていましたが
とある科学の世界で、あのような炎を創りだすのは難しいと意見をいただき考えました
分解・吸収はいくら設定でも通常の発火能力では物理的に不可能です
訂正したい点は「終焉廼焔」は発火能力の頂点ではなく
「終焉廼焔」は原石のようで、通常の炎ではなく、吸収・分解の出来る特殊な炎を創りだす能力
ということにしたいのです、発火能力ではなく、特殊な炎を創りだす能力にしたいのです
発火能力者は普通の皆様の知る炎が出ますが、特殊な炎を創りだすと言う事で
吸収・分解、第八話である、複合粒子の崩壊と吸収が可能な炎にしたいのです

今更変更するなよ！と思う方々も居ると思います
本当に申し訳ありませんｍ－－ｍ
以後、色々な能力について、もう一度考え直したいと思います
まだまだ直す点は多いと思いますが・・・
こんな駄作ですが、よろしければ次回からも、よろしくお願いしますｍ－－ｍ

第九話　暗部戦争（イグニッション）（前書き）

作者「突然の能力設定訂正すいませんでした」

焔真「勢いの結果がこれだな」

作者「暗部同士の戦いは原作と違います」

焔真「グループが全員のこるパターンと違うのか？」

作者「全然違いますのでw」

第九話　暗部戦争（イグニッション）

「グループ」　「スクール」　「アイテム」　「ブロック」　「メンバー」

学園都市の裏の世界にはこれらの組織が存在する

―己のため動く者。―

―闇を好み、殺しを楽しむ者。―

―他者の希望を打ち砕こうとする者。―

―大切な人のために立ち向かう者。―

―上層部へ戦いを挑む者。―

―反乱分子を仕留める者。―

―暴走を暴力によって食い止める者。―

「グループ」のメンバー「一方通行（アクセラレータ）」

「アイテム」のメンバー・神童焔真・麦野沈利

「スクール」のリーダー・垣根帝督

これらの闇が交わる物語が今始まる……。

いつも通り自由だと俺は思う
昼、いつもの第七学区のファミレス、神童焔真は通常より一人多いメンバーで会議していた
「浜面仕上」である。「アイテム」の正規メンバーではなくその下部組織所属で主に雑用である

「あれー？今日のシャケ弁と昨日のシャケ弁なんか違う気がするけどー。あれー？」
「俺は通常通りにしか見えないぞ？」
「うーん？何か違う気がするけどー」

焔真達「アイテム」は、ある事件について話合うため集まった

「やっぱ、時代はサバ缶、サバ缶がきてるって訳よ」
「やっぱ、時代は、どこぞの鬼畜妹だよ、音楽最高で内容無理ゲー」

サバ缶の話と弾幕シューティングで、まったく話が通じ合ってない二人
浜面はカオスの空気に混乱しているようだ
「この問題作は……要チェックです、焔真はどう思いますか？」
「ん？ぁーやっぱ個人的には、ゆかりんが好きだなーうん。」
ここでも話が通じ合わない「アイテム」メンバー
滝壺は何かを受信している、麦野が話題をだした
「んでさー昼前に統括理事会の一人、親船最中が狙撃されかけた事件……こっちもそろそろ動きたい訳なんだけど」
「つか、結局、私その情報もってないんだけど」
フレンダが言うと、一瞬麦野の動作が止まる、麦野は浜面に全員の携帯へ情報を送るよう指示
……送られてきたのは……
「何故にバニー？……７０点」
「アイテム」のメンバーは携帯を畳み、心の扉を閉め、戸締りを確認し
心の奥底まで行き、シェルターを閉め、浜面から全面的に退避した
「違っ！待て！！やり直させろ！今のは何かの間違いなんだ！」
手遅れであろう１００人以上の人間を束ねたリーダー浜面は大声をあげる

「特別に７１点」
「結局、浜面キモイんですけど……何が７１点なの？」
「バニーの点数だ」
「何なら高得点なんですか？」
「……俺はメイド服かなぁー」
「メ、メイド服ねぇー（絹旗よくやった！」
「大丈夫だよ、はまづら。私はそんな浜面を応援してる」

焔真の意見を聞いて携帯にメモする麦野
色々と終わった顔をしている浜面

「スクールのスナイパーさん達は消したんじゃなかったっけ？」
「新しく雇ったんだろうね、こちらの警告を無視して」
「イケメルヘンが……」

「スクール」は「アイテム」の警告を無視してでも、スナイパーを雇い
親船最中を暗殺する必要があった
十二人の統括理事会始めてとして、学園都市にはいくつかのＶＩＰ認定された人間、組織がいる
何故？影響力もない、親船最中を「スクール」は暗殺したのだろうか
焔真が考えこんでいると話は進んでいた
「浜面、車を探してきてちょうだい、すぐ動くことになりそうだし」
浜面は何か言葉を漏らしたが、聞き取れなかった
「そうね、だから何？」

浜面は車を探しに行った
焔真的な考えでは、この先戦いであろう、強者同士の……と思っていた

「「スクール」と戦うことになるかもしれんぞ？」
「んー、そうなるかもしれないけど、仕事だからやるしか無いでしょ？」
「まぁ知り合いを殺すのは勘弁だけどな」
「第３位さんと殺し合うかもって？……まぁ焔真が死ななければいいわ」

少し顔を紅くして麦野が言う
自分の知る組織は動き出しているだろう
超能力者は４人居る……しかも麦野は一番下という状況である

「俺の知り合いで死人は……せめて一人ぐらいだな、敵でも」
「超手加減するんですか？」
「いや……戦う選択肢を変更させるのさ……無理ゲーか？」

組織には組織のやる事、目的がある
戦う選択肢は避けられない運命であるだろう
暗部同士の殺し合いが始まろうとしていた……

第九話　暗部戦争（イグニッション）（後書き）

作者「次回から暗部同士の戦いです」

焔真「ちゃっかり浜面登場ｗｗ」

作者「原作と凄く違いますので、お願いします」

作者「レベル５は皆無事な可能性も……」

焔真「小説で言うと……１５ぐらいだったな」

作者「小説とか読んでない人には内容が理解できないかも？」

焔真「そこは読者様皆が分かるよう頑張れ」

作者「努力します……それでは！」

作者「皆様からの評価・感想待ってますｍ－－ｍ」

作者「駄文ですが……次回もよろしくお願いします！」

作者「次回第十話　未元物質（ダークマター）」

第十話　未元物質（ダークマター）（前書き）

作者「暗部同士の殺し合いパート１です」

焔真「どこまで続くんだ？」

作者「分かりません！（キリッ！」

焔真「……」

作者「原作とは全然違いますが、どうぞ～」

第十話　未元物質（ダークマター）

俺以外の浜面を含むメンバーは今ごろ、どっかの研究所にでも行ったのだろう
俺は……仕事が終わって向かう途中です、はい
「スクール」と「アイテム」が戦い始まるであろう
場所を詳しく言うと第十八学区の素粒子工学研究所がある

「派手にやらかしたな……」

使い物にならなくなった車
何かと激突したクレーン者、「アイテム」メンバーは居ないようだ
ホステス？的なドレスを着た少女が一人歩いてきている
「スクール」のメンバーである

「なぁーここら辺で何があったか……麦野達はどこだ？」
「なっ！？……どうして……ここに」

一応有名人である、これでも学園都市で第一位の能力者
暗部の中では……有名であろう

「まぁいい……帝督に伝言……俺の仲間殺したら消すって言っといて」
「くっ……」

この女の能力は「心理定規（メジャーハート）」
人の心の距離を操る能力であるが……

「まぁ……また会うことになるだろうよ」

焔真は敵に背を向け、堂々と去っていった……

「スクール」は研究所から「ある物」ゲットし
「アイテム」はメンバーがバラバラになった

「スクール」所属の垣根帝督は第四学区にいた
冷凍倉庫の中にワゴンを隠し、何かを取り出した
「ピンセット」
超微粒物体干渉用吸着式マニピュレータ。
原子よりも小さい素粒子を掴む機械の指である

垣根は、そのピンセットの螺子を緩めていく
「こ、壊してしまうのですか？」
「組み直すんだ」
垣根はピンセットを金属グルーブのような長い爪が二本ある者に変えた
運転手に連絡するように言うと……
バギン！！
と言う音がして運転手が叫ぶと運転手の皮膚は消滅していった……
中年男が現れた……
「「アイテム」か……」
「残念だが私は「メンバー」だ、垣根少年」
垣根に向けて何かを言おうとすると、すぐ近くで爆発音がした
「時にメルヘン少年、君は自分をニュータイプだと思ったことはあるかね？」
「ハッ……俺はマイスターだ」
「超能力者二人も殺すことになるとは」
「メンバー」の中年男がペラペラとしゃべり出す
回路も動力もない、特定の周波数に応じて特定の反応を示すだけの反射合金の塊
ラジコン操作感覚で動かせる殺人物、彼は「オジギソウ」と呼んでいる
ザァ！！
と垣根と焔真の周囲を囲み逃げ道を探し出す前に襲い掛かった

博士と呼ばれる中年男は第四学区のバザーの中に居た
仲間と連絡を取り合い、無駄事を話しながら
「オジギソウ」に命令するが……反応がない

爆発音とともに冷凍倉庫内部から粉々に吹き飛ばされたからだ

垣根と焔真は傷一つなく、ゆっくりと歩いている

「よぉ、確か絶望したのは１２歳の冬っつったよな」
「せっかくの知り合いとの再開中に……」

「オジギソウ」に指示しても反応はない
切羽詰まった博士を見て二人は笑う

「もう一度絶望しろコラ」
「一言言うなら乙」

「よく分かったな？」
「麦野達と戦闘してたようだな……殺したら、お前を殺すぞ？」

ハッと垣根は笑う、お互い戦闘態勢もとらず
能力も展開させたおらず、ただ立っている

「アレイスターに訪問でもするのが目的だろ？」
「あぁ……テメェを倒して一位の実力を手にすれば速いんだが」

垣根と焔真の戦闘レベルには絶大的な差がある
一度全力で戦ったが、焔真の圧勝で終わっている

「あっちから出向くように頑張るってか？」
「ハッ……どうだかな」
「兎に角、俺は今んとこ敵だな……「アイテム」だしな、じゃーなメルヘン少年」
「何しに来たんだ……年中アイス馬鹿」

焔真は「スクール」の隠れ家的な場所から帰ってくるフレンダを回収

「アイテム」のメンバー全員と合流したのであった……

第十話　未元物質（ダークマター）（後書き）

作者「原作と違う点は「アイテム」メンバーと超能力者同士の戦闘が無いとこです！」

焔真「全然違う話だな」

作者「フレンダは真っ二つになったらあかん！」

焔真「……」

作者「ということです、それでは！」

作者「皆様からの評価・感想待ってますｍ＿ｍ」

作者「駄文ですが……次回もよろしくお願いします！」

次回「第十一話、麦野沈利（メルトダウナー）」

第十一話、麦野沈利（メルトダウナー）（前書き）

作者「麦野んだー麦野んだー」

焔真「作者が壊れたー！」

作者「今回は麦野さんと焔真が頑張ります？」

焔真「また疑問系……」

第十一話、麦野沈利（メルトダウナー）

「スクール」との戦闘でバラバラになった「アイテム」だが
なんとか全員メンバーが揃った「アイテム」
一時、メンバーを休憩させるとのことで麦野と焔真は別々に、どこかへ消えていった

「フレンダは無事か……滝壺は能力的に危ないな」

滝壺の能力、「能力追跡（ＡＩＭストーカー）
「体晶」を使用し、意図的に拒絶反応を起こし、能力を暴走させる
「体晶」は「暴走能力の法則解析用誘爆実験」に使われていたもの
「能力追跡」のように暴走状態のほうが良い結果を出せる能力者に使用させる

「2~ 3回で崩壊する……使わせる訳にはいかない」
「もう「アイテム」なんか居なくてもいいのでは？」

突然背後からの声、声的には男
焔真が振り向くと、自分より大きく、雰囲気からして紳士的な男が立っていた

「誰だ……どこの組織だ」
「我々は、この「暗部戦争」で暗部の中でも実力者達が消えていく中で立ち上がろうとした者達です」
「この争いを利用しようってか……」

「我々の調べでは、有力な暗部はダメージを負っています「アイテム」もそうでしょう？」

どこで調べたかは知らないが、完璧な答えである
この争いで有力な暗部はダメージを負っている
「アイテム」もメンバーは誰一人として死ななくても、滝壷のように危ない者も居る

「だから死にそうな組織ではなく、今なら行動を起こせる組織に入れってか？」
「ご理解いただけましたか……さすが超能力者」

一瞬の静寂……

「ふざけてるのか？」
「は？……」

焔真の怒りの態度に理解できない男
今ここで「アイテム」抜けて新しい組織で活動すれば、いい結果が出せるだろう
何故？この男は拒否するのか……

「俺は何があろうと「アイテム」から出るつもりはない」
「それは何故でしょうか？」
「あのメンバーが「アイテム」に居るからだ」

今の正規メンバー、麦野、絹旗、フレンダ、滝壷
このメンバーが居るからこそ、俺はここに居たいと思う

「俺は、どんな手段を使おうと、今の「アイテム」を崩壊させない」

「何故？……貴方ほどの能力者がそこまでして？」
「今の俺が考える、絶対的な居場所だからだ」

焔真が言うと、男と焔真を囲むように黒い炎が展開する
男は突然、能力を発動され動けない……

「残念だったな……俺に「アイテム」離脱の話を持ちかけた時点でゲームオーバーなんだよ」
「くっ……何故だ……今なら革命を起こせるかもしれないのに！」
「俺に革命なんて必要ねぇ……必要なのはメンバーが楽しく居られる時間だ」

男は拳銃を取り出すが、黒炎が迫り、叫びをあげることなく消し炭になった
焔真は一人不吉な笑みをつくり……

「「アイテム」崩壊を狙う暗部……俺が消し炭にしてやるよ……」

一人、誰も居ない空間に話しかけていた……。

「アイテム」のリーダー、麦野沈利はメンバーのため食料を買ってきていた
そこの中の大半は、焔真へのアイスなのだが……
すぐに帰って、焔真の反応が楽しみな麦野は近道で帰れる誰も居ない路地を歩いていた

「「アイテム」の麦野さんかしら？」
「……「スクール」？」
「あたし達はこの争いの流れにのって立ち上がろうとする者達よ」

急いで帰りたい麦野だが、この状況で帰れば面倒な事になるだろうと予測した

「強いとこが潰れてくから今なら行動できるって訳ね……」
「さすが超能力者ねぇ……今なら歓迎するわよ」

確かに、今レベル5が居るような組織が動けば結果は得られる
麦野も第五位の能力者である、結果は得られるであろう
女が良い結果を聞こうと思って血近づいた瞬間

ピュンッ！

「ッ！？」
「あら？……避けられちゃった」

「原子崩し（メルトダウナー）」
学園都市、８人のレベル５の第五位の能力
麦野から放たれた、真っ白な不健康的な光の筋、雷撃みたいな物の正体は電子線だ
電子は状況に応じて光のように、「粒子」と「波形」の双方の性質を示すものだが
麦野は、この二つの中心「曖昧なままの電子」を強制的に操るこのできる能力である
このように「曖昧なまま固定された電子」は物体にぶつかっても「粒子」「波形」
どちらの反応を示すか決定されず、その場に「留まる」という結果になる
本来、ゼロに近い質量の電子だが、「留まる」ことによって擬似的な壁となり
その壁は速度のままに恐ろしい威力である

「超能力者を利用しようなんて……テメェみてぇーな餓鬼には速いんだよ！」

麦野を中心に多くの電子線が放たれる
これが「原子崩し（メルトダウナー）」
正式な分類を「粒機波形高速砲」
「超電磁砲（レールガン）」とは違い、波も粒子も使わず電子を操る能力者

「へぇー空間移動（テレポーター）能力者なんだ」
「はぁ……はぁ……死ね！超能力者！」

女は麦野に向けて薄い板を空間移動させて殺すつもりだったのだろうが
麦野に逆算されて回避されるが、少し遅れて、持っていた袋に直撃した
入っていたアイス２つが無駄になった……

「なっ！……」
「ふん！……甘かったわね、これならアンタの首も真っ二つよ」
今の麦野に目の前の女の言葉など耳に入っていなかった……
「ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね」
女は、今の麦野の不吉な笑みを見ただけで下がってしまった
頭に思いついたのは「殺される」その一文字だけだった
今の状態では、自分を空間移動はできないので壁になるものを移動させるも……

「その程度の物で、遮蔽物になるとでも？」
右手を前に出し、一筋の巨大な電子線によって
鉄の板ごと、女を貫き、結果を見る前に麦野は帰っていった……

～「アイテム」の隠れ家～

「おー麦野、おかえり」
「遅くなっちゃったわね……はい、アイス」

凄まじい速さでアイスを取り、気づけば食べ始めていた

「これは……いちごおでん味のアイス……さすが麦野！」
「変な女に攻撃されて２つ無駄になっちゃったけど」
「麦野のとこにも来たのか……」

完全に空気な他のメンバーは、音を立てないように自分達用に買ってきて貰った物を食べ始まる

「まぁ、雑魚だったけどね」
「同じく、……それより……それはマンゴーＤＸじゃないかー！麦野ありがとー！」

まだまだ「アイテム」は平和だった……

第十一話、麦野沈利（メルトダウナー）（後書き）

作者「マジ麦野ん最高です」

焔真「まだ壊れてやがる……」

作者「あっ！そうだ、皆様、感想と指摘、ありがとうございます！
指摘の内容も、とても役立つことばかりで文才の無い作者は
非常に助かっています、今後とも、よろしくです！」

焔真「ダメ作者は指摘されるときは、されまくりー」

作者「頑張らなくては！……それでは！」

作者「皆様からの評価・感想待ってますｍ－－ｍ」

作者「駄文ですが……次回もよろしくです！」

作者「次回　第十二話、浜面仕上（レベルゼロ）」

第十二話、浜面仕上（レベルゼロ）（前書き）

作者「今回は焔真と浜面君が頑張ります」

焔真「バニー好きの勇士が見れるのか？」

作者「・・・」

焔真「何故そこで黙る？」

第十二話、浜面仕上（レベルゼロ）

滝壷理后の能力「能力追跡（ＡＩＭストーカー）」
一度記憶すれば、どこに逃げたって居場所が分かる能力
その能力一つで戦力は凄く変わるものだ……

「くそっ！、なんだ？アイツ……」

浜面仕上は追われていた
敵の目的は「体晶」、そこから考えれば目的は滝壷である
浜面は焔真から「体晶」を預かり、それでこうなった……
後１~２回使用すれば滝壷は崩壊する……焔真が浜面に言った言葉だ

「これを絶対に守りきる！」

敵の数は一人、自分よりも大きい男
巨大な斧を持って、自分を魔術師と名乗っていた……
「世の中には魔法みてぇーなの使う奴も居るのかよ！」
「魔法では無く……魔術だ」
「っ！？」

自分の足の速さには自信は無いが、そこまで遅い訳でもない
全力で走ったのに……男は、３０ｍぐらい後ろに来ていた

「潰れろ」
「なっ！？」

斧を振り下ろした……それだけで地面は割れ、もの凄い衝撃波が浜面を襲う
吹き飛ばされるも、気絶までいくダメージでは無い

「（ただの馬鹿力能力？それとも……マジで魔術ってやつか？）」

距離は離れていた、あの距離で、あの威力
近くで一撃貰えば、そこで終わるであろう……
浜面は全力で走りながらも考えた……どうにかして「体晶」を守る術を

「無駄な足掻きだ……諦めろ」
「（アイテムのメンバーが居る場所まで逃げ切れるか？）」

「アイテム」のメンバーが居れば、さすがの大男も引くだろう
自分一人で命捨てる覚悟で挑むよりも確実に生き残る道を選択し

た浜面
振り向けば、男は斧を振り終えていた……

「ふっ……これで奴らの居場所も掴めるだろう」
「テメェはここでゲームオーバーだけどな？」
「……終焉廼焔（ラグナロク）か……」

ここまで大きな音ならば、さすがに分かりやすいな
浜面は……まだ生きているか……
それにしても謎の敵さんが多すぎるな……最近

「消し炭になりやがれ」
「貴様との戦闘は予想通りだ……」

「俺と戦うことを予想してて挑むか……舐められたもんだな」
焔真の黒炎が男へ向かう、その体から想像も出来ない速さで回避する男
巨大な斧を地面に突き刺すと地面が焔真を地下に落とすように割れた
「ちっ……どんな馬鹿力してやがる」
「消えろ！終焉廼焔！」
「テメェーに負けるほど俺は弱くはないんだよ！」
焔真を纏うように黒い炎が竜の形をして男へ放たれる
まるで生きているかのような竜は男を喰らい殺すが如く襲い掛かる
「くっ！……」
「絶大的な力の差を思い知れ！」
巨大な爆発、周囲を衝撃波が襲い掛かり
男は死んだ……確信して男の居た場所を見るが……死体も灰も何も無かった
「ちっ……何が起きてるんだ？……この学園都市は？」
焔真が調べた限りでは、魔術師が数多く潜入しているらしい
謎の暗部、最近では「グループ」も動き出しているらしい
「まずは……奴らだな……」
焔真は浜面を回収して……闇へ消えていった……

第十二話、浜面仕上（レベルゼロ）（後書き）

作者「急展開で、すみませんｍ－－ｍ」

焔真「奴らはなんなんだ？」

作者「「アイテム」と奴らの戦いが第一章的な感じです」

焔真「原作は関係無いと？」

作者「今のところ全然関係無いと思う……」

焔真「意味不明な組織は何故毎回のように出てくるんだ～？」

作者「火種が欲しいの的な？……それでは！」

作者「皆様からの評価・感想待ってますｍ－－ｍ」

作者「駄文ですが……次回もよろしくお願いします！」

作者「次回　第十三話　移動封印（ストーリーストップ）」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7962p/

とある世界の終焉廼焔（ラグナロク）

2011年3月18日11時58分発行